

保育の実践と理論を求めて

津 守 真

最近入った子は、まだ母親から離れない。母親が部屋に坐っていれば、庭から室内へと歩きまわっている。私は母親の傍に腰をおろすと、母親は言う。「この子は、いつも落着きがないんです。家でも、父親が新聞をよんでいると一寸そこにいつて新聞をとり上げ、上の子が漫画をみているとそこにゆき、私が雑誌をよんでいると一寸きて、すぐいつてしまうんです。」私は話をききながら、母親はこの子の行動をこのように理解しているのかと思つた。そこで母親に「このひとは、落ち着きがないんでしょうか。」と問い返した。実際、R子は、砂場にいる子どものところについて立止り、一寸見ると、水と遊んでいる子どもところに立ち寄り、それから私共のところに来て、じきに立ち去る。しかし、よく見ていると、そこにいる人に視線を少しとどめては次に移っているのである。私はその

ことを母親に告げた。この行動を「落ち着かない」と言うことは、本当はもっと違った行動であるのに、そのように理解しているに他ならない。その理解の仕方は、もう一度考え直し、その行動を通して、その子どもが何を望んでいるのかを、最初から考えてみることに、保育をするための課題であろう。

もしかすると、この子どもは、立ち寄るとの人からも、本気になって相手をしてもらえないのかもしれない。私も母親も、R子が私共のところ立ち寄ったときに、観察はしているけれども、この子の望みにこたえようとしてはいないのである。この日はこれで終わったが、その次の日から、この子どもにしっかりとこたえる者となろうと私は思った。そして、実際そのようにした。私がR子の傍を離れないことがわかると、R子は私のそばで泥をこねて水の中に入れてをしはじめた。そのときには、そこにとどまり、かなりの時間を過す。そこから、R子と私との新しい関係がはじまり、両者の間には、新たな事態の展開がつついた。

いま、その経過を述べることは差し控えるが、R子と私との間に、次第に明るく開ける関係が生じた契機は、最初に「落ち着かない」という理解の仕方をやめて、眼前に示されている現象をよく見ることによって、新たな理解の仕方をくり出すことにあった。そこで試みた理解は、事態の展開と共に、何度もつくりかえられねばならないかもしれない。そして、決して、絶対的な他者の理解などというものはなし得られないであろう。けれども、子どもが現在を意味あるものとして生きられるような、そういう理解の仕方を大人の

側につくり出すことができるならば、その理解の仕方は、真実により一步近づいたと考えるよいであろう。

このようなことを考えているときに、私は、カナダのエドモントンで行われた、人間科学研究会議で知り合った、ドイツのミュンヘン大学から来た中堅の教育学者、ヘルムート・ダナーの著書、「精神科学としての教育学の方法」を読んだ。その冒頭に、彼は、ドイツ語で「科学（ウィッセンシャフト）」と言うとき、明らかに異なったふたつの伝統、自然科学と、精神科学とがあることを指摘する。そして、自然科学の方法論を人間の教育に適用することをしりぞけ、精神科学の方法を選ぶ。自由な精神をもつ主体としての人間は、互いに独自で対等な主体として互いに理解し合い、共同の生活を形成すべく、共に生きている。教育の場合は、このような意味で、子どもと大人とが生きる場である。そこでは、理解ということ、どのような意味で、子どもと大人とが生きる場である。自然科学において、実証的、客観的方法がその方法論であるのに対して、精神科学においては、「理解」ということが、その方法論となる。この問題は簡単ではない。私共が、あることを理解したと思っ
ていても、じきにそれは一方的な思いこみに過ぎないことを発見する。「対象自体に語る
せる理解」は、一体どのようにして可能になるだろうか。

ダナーは、この書物において、解釈学と現象学と弁証法にその解答を求め、ことに前二者は重要であるという。

いま、ここにこれ以上この点に言及する暇がないのであるが、精神科学（あるいは人間科学、あるいは人間学）の方法論に、新たな眼を向けることによって、人間の教育についての学問を考えようとすることは、新鮮な世界を開いてくれる。理解は、自由な主体同士の相互的なものだから、共同の生活（歴史）を形成する途上で、互いに深め合う動的な性質のものである。

（愛育養護学校）

